太田市町（おだいちちょう）

観音さんに安産の願い

太田市の地名は、室町時代中期・寛正二（一四六一）年の古文書・寺社雑事記に「大田市」として初登場します。このあと天文一五（一五四六）年の文書に「太田市」が見えるほか、時代が下った戦国時代末期の史料に「多田市」と書かれます。当地が、古くから「独立した村落」として生き抜いてきたことのあかしです。

豊臣秀吉の時代になると「太田市村」と呼ばれ、秀吉の重く用いた武将・大野治長の領地となりますが、関ヶ原の合戦を経たあと元和元（一六一五）年以降は、幕府支配地（天領）になって明治時代を迎えます。

明治一五年ごろの同村は、戸数が三一戸で人口が男七〇人・女八〇人、主な物産が麦・菜種・綿（町村誌集）の農村でした。同二二年に耳成村の大字となって明治・大正時代を過ごし、昭和三一年二月に橿原市の大字となり同年一〇月から「橿原市太田市町」となりました。

同町北垣内の天満神社境内に「観音堂」があり石像「子安観音」が祭られています。ここへは古くから、出産を控えた近隣の人たちが安産を願い産土（うぶすな）を、もらいにきていたと伝えられています。